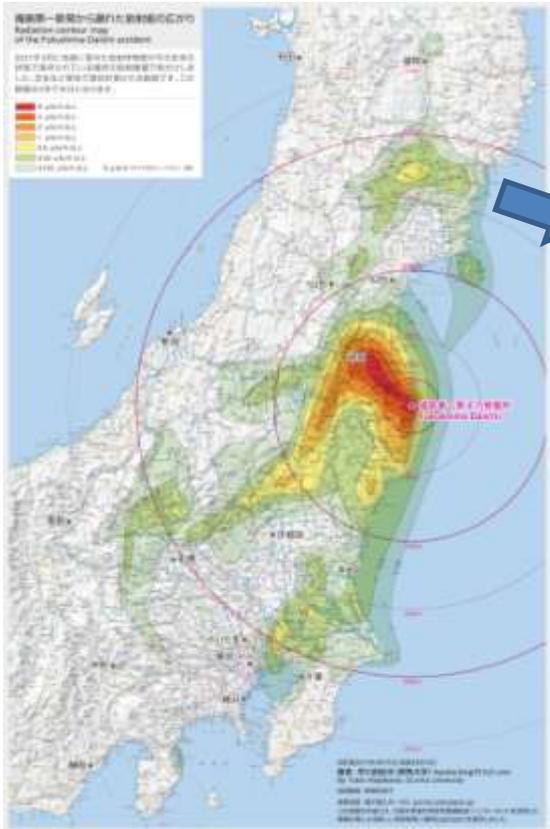


2万ベクレル超えの汚染牧草を燃やす！？  
環境省が進める  
～混ぜて・薄めて・漏らして・ばら撒き計画～

フクロウの会・ちくりん舎  
青木一政

# 岩手県一関で汚染牧草焼却中止を訴える人々



大東町は一関市内から東へ約20キロのところにある



寺崎前地区の環境を守る会の皆さん

## 寺崎前地区



大東清掃センター



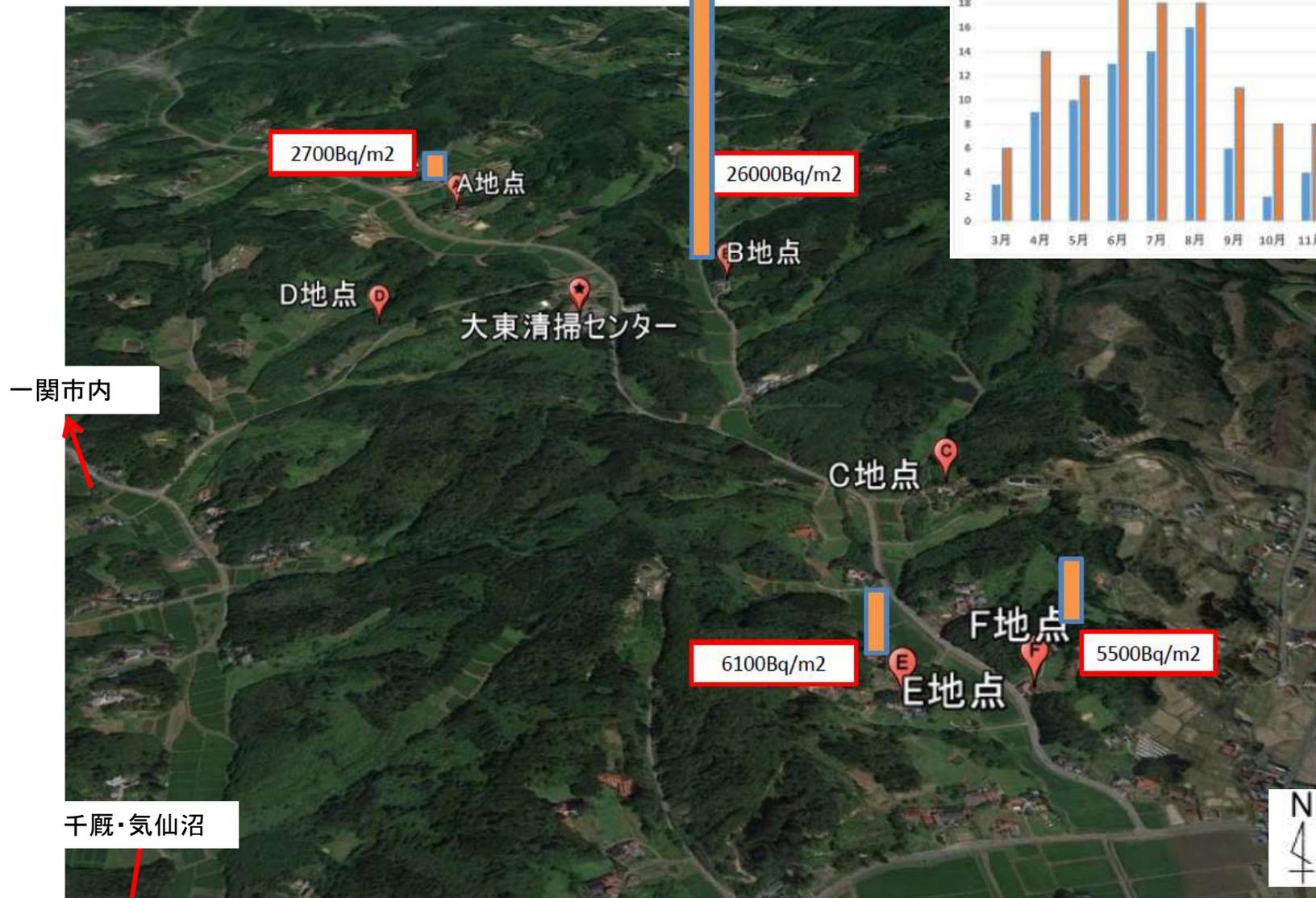
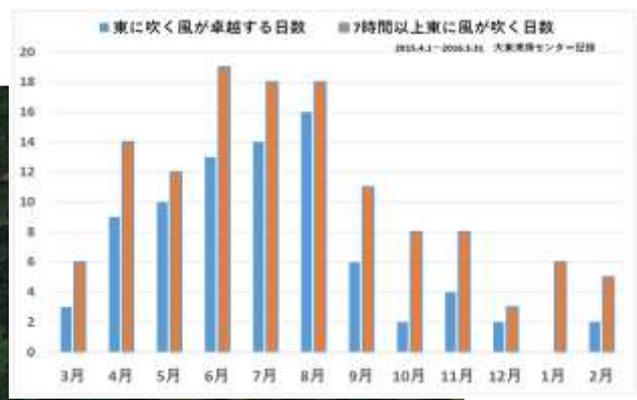
一関名物 餅膳

# 大東清掃センター周辺での土壤汚染調査とリネン吸着法調査

- 2016年8月 ゴミ弁連(たたかう住民とともにゴミ問題の解決を目指す弁護士連絡会)総会 にてリネン吸着法の紹介。  
「寺崎前地区の環境を守る会」菊地弘道氏から大東清掃センターでの汚染(2万ベクレル超え)牧草焼却問題の紹介。  
その場で協力することを約束。
- 2016年9月 フクロウの会青木、ちくりん舎浜田で一関大東清掃センター周辺調査。土壤サンプリング。  
「寺崎前地区の環境を守る会」にてフクロウの会放射能測定Pjtの紹介。
- 2016年9月末～12月中旬 大東清掃センター周辺でリネン設置。
- 2016年12月12日 たまあじさいの会中西氏、フクロウの会青木で一関訪問。  
一関清掃センターの増設問題について「狐禅寺地区の環境を守る会」高橋佐悦氏より説明。守る会例会にてたまあじさいの会、放射能測定Pjtの説明。
- 2017年1月 土壤汚染分析、リネン吸着法調査結果分析。

# 大東清掃センター周辺の土壌汚染調査

大東清掃センター周辺の土壌汚染調査



大東清掃センター周辺では年間を通して東に吹く風(西風)が多い。

# 大東清掃センター周辺でのリネン吸着法調査

(リネン設置期間: 201.9.25~12.15)



リネン設置期間の東に吹く風(西風)時間は西に吹く風(東風)の3.4倍程度

# リネン吸着法調査結果の考察

- 清掃センター西側のD地点が最も高く、次が北西方向のA地点、南東方向のC地点。
- 土壌分析で最も高かったB地点は逆に最も低い値。
- リネンを設置した期間(2016年9月25日～12月15日)の風向調査では東に吹く風(西風)が西に吹く風(東風)の時間の3.4倍程度。風向だけでは説明できない。
- D地点、A地点が高い傾向を示した要因:両地点は大東清掃センターへの廃棄物搬入の道路に面している。
- もう一つの要因として考えられるのは高めに出了たD、A、C地点は大東清掃センターがある峠から谷筋を下った低い位置にある点です。谷筋を下る空気の流れによって運ばれている可能性。



今後、土壌汚染調査、リネン吸着法調査の地点を更に増やして実態の解明を続ける予定

# 高濃度廃棄物手つかず

## 関・汚染牧草6割を焼却したが…

東京電力福島第一原発事故で発生した放射性物質を含む農林業系廃棄物を巡り、岩手県内で最も発生量が多い一関市で、国の基準（1センチあたり8000ベクレル）以下の汚染牧草と一般ごみを一緒に焼却する混焼が進んでいる。処理量は約6割に上り、焼却方針の是非で迷走する宮城県の状態とは対照的に映るが、高濃度の他の廃棄物処理が停滞している事情は一緒。処理場周辺の住民、廃棄物の長期保管を強いられる農家の不安も変わらぬ。

一関市と岩手県平泉町の基準超えの牧草が見つかり、ごみ処理を担う一関市大東町の大東清掃センター。セシウムを含む牧草が一日最大5トン、混焼されている。推計総量0.5300万トンのうち、昨年11月末までに約6割の3800トンが焼かれ、灰は一関市東山清掃センターに最終処分されている。2市町でつくる広域行政組合「よつて」、牧草のセシウム濃度は1センチあたり平均1786ベクレル。これまで数回、よりさらに厳しい5600

ベクレル以下に抑えている。排灰のセシウムは不検出だ」と語る。混焼開始時を振り返り「腐りやすい牧草の早期処理に地元の理解が得られ」と説明する。

今年から、牧草が腐らないうちで焼却したベレットを焼却。昨秋、環境省の補助金6000万円を使い、焼却炉の燃焼機能を強化した。計画通り2018年度に全量処理を予定する。

組合幹部は「濃度が高くない。焼却灰も国の基準よりさらに厳しい5600ベクレル以下に抑えている。排灰のセシウムは不検出だ」と語る。混焼開始時を振り返り「腐りやすい牧草の早期処理に地元の理解が得られ」と説明する。



一関市の放射性物質に汚染された農林業系廃棄物約26000トン。岩手県全体の発生量は5万9000トンの約4割を占める。このうち、灰は約1万4000トン。基準値を超えたりが県内分のほぼ全量出た。発生したため、仮設焼却施設の建設も予定している。県によると、農林業系廃棄物は24市町が保管。

### 話題の発掘

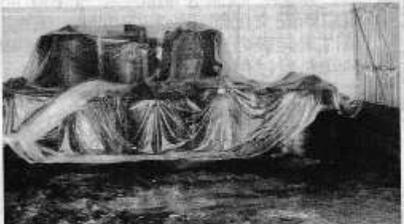
## 汚染牧草焼却続く不安

東京電力福島第一原発事故で飛散した放射性物質を含む農林業系廃棄物が、約二万六千トンの岩手県一関市。同県内では最も多い。国の基準（1センチあたり8000ベクレル）以下の汚染牧草と一般のごみを一緒に焼却する混焼が進むが、処理場周辺の住民、廃棄物の長期保管を強いられる農家の不安が続いている。

### 岩手・一関 原発事故の農業廃棄物

一関市大東町の大東清掃センター。セシウムを含む牧草が一日最大5トン、混焼されている。推計総量六千五百三十八トンのうち、昨年十一月末までに約六割の三千八百八十三トンが焼かれ、灰は一関市東山清掃センターに最終処分されている。

組合幹部は「濃度が高くない。焼却灰も国の基準よりさらに厳しい五六〇〇ベクレル以下に抑えている。排灰のセシウムは不検出だ」と語る。混焼開始時を振り返り「腐りやすい牧草の早期処理に地元の理解が得られ」と説明する。



仮設テント内で処理を持つ。昨年12月、岩手県一関市内で。

混焼中止を求める住民組織代表の男性は「煙突からのセシウム漏れを指摘する専門家もいて、危険性を百パーセント否定できない」と強調する。

セシウム濃度が高い稲わらや堆肥、量が多いほど木

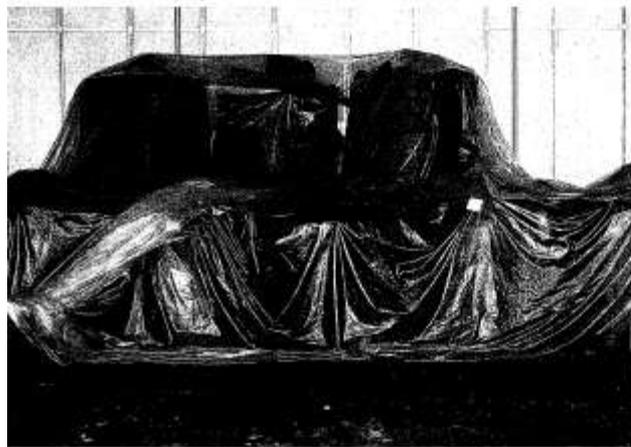
## 住民反発し議論凍結

### 処理施設計画

13年に基準値超えのセシウムを含む牧草を処理した事実が判明し、混焼が約1カ月ストップする事態となった。放射性物質の検査体制や市民との情報共有の在り方が問われた。

混焼中止を求める住民組

織代表の男性は「煙突からセシウム漏れを指摘する専門家もいて、危険性を100パーセント否定できない。一関の事例を宮城の安心材料にするべきではない」と強調する。



などは手つかずの状況だ。指定廃棄物を含む一括処理を見据えた環境省の仮設焼却施設計画を巡り、一関市が建設候補地とした狐禅寺地区の住民が反発し、議論が凍結に追い込まれているためだ。

市が設けた仮設テントで、震災から三年の期限付まで稲わらの保管を受け入れた農業の男性は「震災から五年半以上たっても状況は何も変わらない。行政の言う期限は当てにならない」と不満を抱く。こうしたテントは市内に約八十棟。老朽化を危ぶむ声もある。

勝部修市長は環境省との議論再開を示唆するが、見通しは不透明だ。市は昨年十二月、汚染はた木をチップ化し通常のチップと混ぜて産業用に活用できるかどうかの実証事業を開始。「焼かない処理」の検討も本格化させている。